
記憶のライダー

秋良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶のライダー

【Nコード】

N9235Y

【作者名】

秋良

【あらすじ】

普通に暮らしていた、ライダー・ラノベ・アニメなんかが好きなごく普通の青年が、Wのいる風都へとばされライダーの記憶を宿す「メモリー」の力を使い、Wに協力していくというストーリー。

第一話：Mの邂逅／ここは風都！？（前書き）

初投稿となります。

少々主人公チート気味ですが、まあそれも設定で調整する方向で。

第一話：Mの邂逅／ここは風都！？

「ふい、買えて良かったよ、ロストドライバー！」

さあて、食玩のガイアメモリでも一緒に買ってきますか！」

ライダー、ラノベやアニメなんかが大好きな僕は

今日再販されたロストドライバーをデパートに買いにきて、首尾よく購入に成功。

そして食玩のガイアメモリを手にとったとき、とんでもないことが起きた。

いきなり地面が揺れだしたのだ。

「な、なんだ！地震！？うわっ、足元が！！」

そして、足元の床に穴が開いて僕は落ちていった。

記憶のライダー・第一話：Mの邂逅／ここは風都！？

「う、うん…」

デパートの床に開いた穴から落下したあと、気がついたら僕はとんでもないところにいた。

「…ここ、どこ？ってあのタワーは！？」

そこにあっただのは巨大な風車のついたタワー。つまりここは。

「…風都、なの？」

そしてその時、遠くから悲鳴が聞こえてきた！

「ッ！なんだ！？…まさか！」

僕はそちらのほうへと走っていった。

とあるスタジアムの横の広場。そこでは、T・REXドーパントが破壊活動が続いていた。

「ハハハハ！俺という選手を採用しなかった球団など必要ない！

崩れてしまえ！」

破壊を続けるドーパント。しかしそこへ駆けつける一人の男が。

「おっとそこまでだ、ドーパント」

そしてドーパントとスタジアムの間に立ちはだかる。

「復讐なんて、やつても空しいだけだろうが！」

「うるさい！邪魔をするならお前も噛み砕いてやる！」

そう叫び、牙をむく

「ちっ、やっぱ話は聞かねえか…仕方ねえ、フィリップ！」

『ああ、翔太郎。行くよ』

「CYCLONE！」

「頼むぜ、相棒」

「JOKER！」

「変身！！」

「CYCLONE！」「JOKER！」

地球の声、ガイアウィスパーと共に彼らは変身した。風都を守る「仮面ライダー」に

「貴様らは！？」

「俺たちは」

「二人で一人の仮面ライダー」

『さあ、お前の罪を、数えろ！』

そのスタジアムの近くの物陰でその戦いを見ていた僕は、その光景を目撃していた。

「あれが、本物のダブル…」

すると、僕の持っているバッグの中から、

「MEMORY！」というガイアウィスパーが鳴り響く！

「え…！？メモリーメモリ？こんなのは持ってなかったはずだけど・

・まさか。」

そして僕は、バッグの中から剥き身で入っていたロストドライバーを取り出した。

「ちゃんと箱に入っていたはずなのに。それに材質も金属になってる…試してみるか…変身！」

「MEMORY！」

そして僕の周りを地球の記憶が取り巻き、僕も変身を遂げていた。まるで地球の記憶の結晶のような緑のクリスタルカラーの装甲の、仮面ライダージョーカーのような姿のライダーへ。

「これが…仮面ライダーの力。よし！」

僕は、その姿でドーパントとダブルの方へと駆けていった。

「どうしたどうした！？風都を守る仮面ライダーとやらの実力は、その程度のものか！！」

そのころWは、T・REXドーパントのパワーに圧倒されていた。

「クッ、こいつ、明らかに今までのドーパントより強えぞ、フィリップ！」

「これは…メモリとの適合率が高いのか？興味深い。」

「フィリップ…今はんなことはいいだろうが！とつとと対抗策を考えてくれ！」

そんなコントを繰り返しながらT・REXの攻撃をかわし続けるW。しかし、WにT・REXの尾が振り下ろされる！

「やべえ、かわし切れねえ！」

「させません！」

その声とともに、横合いから緑に輝く腕が伸びドーパントの尾を弾き飛ばした。

「お、お前は？」

「お、お前は？」

翔太郎さんがこっちを見て呆然としている。まあ、当たり前だけど。
「大丈夫ですか、W！」

「僕たちのことを知っている…一体、何者なんだい？君は」

「僕は通りすがりの仮面ライダー…じゃなかった、仮面ライダーメモリー！」

「あなたたちに協力します！」

僕はドーパントを殴り飛ばしつつ、ダブルに呼びかけた。

「メモリー…『記憶』の記憶？おもしろい」

「だからどうでもいいだろフィリップ！メモリー、協力助かる！行くぜ！」

「はい、行きますよ！」

そう答えつつ、僕はひとつの疑問を感じていた。

（なんで、僕にはこのメモリの力が判るんだ…？）

そうこうしているうちに、Wの本領が発揮される。

「メモリチェンジだ、フィリップ！」

「このドーパントの硬さには、このメモリだ」

「HEAT！」「METAL！」

ガイアウィスパーと共にWのカラーリングが変更され、メモリチェンジが完了した。

「仮面ライダーダブル・ヒートメタルか。だったらこっちも！」

そう言い、僕はマキシマムスロットの横にある

『ウェポンスロット』にメモリーメモリを一度セット。

「メモリー！」

すると、グリーンクリスタルカラーのエンジンブレード、

『メモリーブレード』が降って来て僕の横に刺さった。

「一気に決めましょう、ダブル！」

「ああ、行くぜフィリップ！」

「オーケー、翔太郎。メモリーブレイクだ！」

W、メモリー双方の武器にガイアメモリを装填。

「METAL! MAXIMUM DRIVE!」

「MEMORY! MAXIMUM DRIVE!」

『メタルブランディング!』

「メモリーデリーター!」

ダブルが炎を纏ったメタルシャフトでドーパントを吹き飛ばし、それをメモリーが緑色の閃光を放つメモリーブレードで叩き斬る。

「ぐああああああ...」

T・REXドーパントの絶叫と共にドーパントは倒され、爆煙が晴れた後には一人の男と、壊れた「T」のガイアメモリが落ちていた。

T・REXドーパントを倒した後、僕はWに声をかける。

「やりましたね、翔太郎さん、フィリップさん」

「おい、お前なんで俺たちの事知ってるんだ?」

「それに、そのメモリとロストドライバーはどうしたんだい?」

「ああ、そうですね。まずは、変身を解除します。」

そして、変身をといた僕は二人に自己紹介をした。

「僕の名前は、星雄^{ほしお} 聡里^{さとし}です。はじめまして、仮面ライダーダブル。

そして、これからよろしくお願いします」

こうして、地球の記憶を巡る「本来とは違う」Wの物語が始まった。

To Be Continued...

第一話：Mの邂逅／ここは風都！？（後書き）

さ「はじめまして！聡里です」

作「初投稿になります、作者です。これから、よろしくおねがいします」

さ「作者さん、僕を呼んだのは何ですか？」

作「いや、面白そうだから」

さ「フイ」

作「まったまった、メモリーブレードを構えるな！怖いから！

それはそれとして、聡里の設定をここで紹介します」

星雄 聡里：ほしお さとり 18歳

バイクの免許を取り立ての大学一年生（ちなみに大型二輪）。

だからライダーと名乗って問題なし（そんな理由かい！by聡里）。

性格は子供っぽく、ボケとツツコミ双方こなす。

しかしツツコミの方向性がときどきおかしい。

第一級フラグ建築士（無自覚）。

ロストドライバーを買いにデパートに行き、購入できたところで謎の現象に巻き込まれ、風都へと移動してしまった。

変身するライダーは仮面ライダーメモリー。

戦う理由はまだ見つかっていないが、左たちの事務所に転がり込む羽目になる。

仮面ライダーメモリー

『記憶』の記憶を持った特殊なガイアメモリを使い変身するライダー。

ドライバーはロストドライバーによく似ているが、ベルトにはマキシラムスロットの他に「ウェポンスロット」と「チェンジスロット」

、「アビリティスロット」の三つと、「メモリエジェクター」というメモリ射出口がある。

（それぞれの機能は発揮される回に解説）

使用武器：メモリーブレード、????

メモリーブレードはエンジンブレードの記憶を元に構築されていて、ほぼ同等の機能を持つ。しかし、使用するメモリはメモリーのメモリをそのまま使用するため、ギジメモリでは出せない高出力の攻撃が可能。

作「…とまあ、今回はこんな具合だな。」

さ「なんていうか、まだまだ謎だらけですね」

作「まあ、第一話でいきなりはおかしいだろ？」

さ「ええ、ですが…第一級フラグ建築士（無自覚）」

作「こなへんはおいおい出します。適当に」

さ「何考えてるんですか？」

作「べつつにいゝ？」

さ「怪しい…」ジャキンツ！

作「まったまった、だからエンジンブレード構えるなツ！

そ、それでは皆さん、またいつかー！」

さ「逃げんなー！」

第二話：Mの邂逅／聖夜の攻防（前書き）

作者「今回はクリスマスも近いので、クリスマスにちなんだエピソードです」

聡里「って、盛大なネタバレになってませんか!？」

作者「大丈夫だ、問題ない」

聡里「はあ……もうなんでもいいや。それでは、今回登場する武器の解説をします。といっても、簡単なものですけどね」

メモリーシャフト

メタルシャフトの赤の部分がグリーンクリスタルになったもの。

特に本体に差異はない。

特殊機能としては、オリジナルメモリガジェットを接続して使用できる。

聡里「こんな感じです。オリジナルガジェットに関しては、ネタバレになるので

あとがきに書きます」

作者「それじゃ、本編どうぞ」

第二話：Mの邂逅／聖夜の攻防

「成程：大体事情はわかった。買い物をしていたら、いつのまにかこの風都にいた、と」

翔太郎さんが僕にそう聞いてくる。

場所は鳴海探偵事務所。翔太郎さんとフィリップさんが二人で切り盛りしている探偵事務所だ。

「はい。突拍子もないとは思いますが、そうなんです。」

「それにしても、なぜ君は僕たちのことを知っているんだい？それも、ガイアメモリの力についてまで」

「えつとですね、お二人の変身する『仮面ライダーW』、そしてそのシリーズである『仮面ライダーシリーズ』は僕らの世界では特撮ドラマなんです」

僕のその発言に、翔太郎さんとフィリップさんは驚愕する。

「俺たちの戦いが、テレビドラマあ！？」

「なるほど、パラルワールドがあるならばそんな世界があってもおかしくない……面白い。」

ムラムラするねえ」

フィリップさんも翔太郎さんも、本当にテレビ通りなんだ……見てるこっちが面白いよ。

「だったら、君はこれからどんなドーパントが出てくるのかという記憶も持っているのでは？」

だとすれば、捜査もなにも必要なくなるんだけどね」

「それはできないんです。今の僕は、その記憶を思い出すことができないみたいなので。」

ですけど、その局面にあつたら思い出せるみたいですよ」

まったく都合のいい記憶喪失みたいだなあ。

「そういえば、君の持っているメモリは『メモリー』のメモリだと

言っていたね。

一体、どんな能力があるのか教えてくれないかな？」

「もちろんですよ、フィリップさん。僕のメモリ、メモリーメモリは限定的に地球の本棚の一部へアクセスし、情報を引き出す能力があります」

その説明で、彼はまた驚いたようだった。

「地球の本棚へ？……興味深い。ぜひ君のメモリを調べさせてくれ！大丈夫、絶対に壊さないから！」

その迫力に気おされながら僕が了承すると、

フィリップさんはスキップでもしかねない機嫌のよさで秘密の地下室へ入っていった。

「あ、おいフィリップ！……ったく、しゃーなーな。

とにかく、お前行くあて無いんだろ？だったら、ここで働いてみる気は無いか？」

とんでもなく良い提案だった。魅力的なんだけど、大丈夫かな？

「え、いいんですか！？でも、ご迷惑なんじゃ……？」

「いいや、迷惑なんかじゃないぜ。むしろ、仮面ライダーメモリーだっけか？」

の力を貸してくれると俺たちも仕事がやりやすいからな」

「…成程、ギヴ&テイクってことですか。でしたら、こちらも協力は惜しみません。

存分に僕の力、使ってください」

そして、僕は鳴海探偵事務所の助手として、Wの世界で暮らすことになった。

…のはいいんだけど。

「こりゃああ！」

スッパァン！！

「痛てっ！」

「あいたッ！」

僕と翔太郎さんの後頭部になにかがいい音をたてて打ち付けられ、

僕は頭を抑える。

「亜樹子オ！いいかげん人の頭をスリッパでブツ叩くのやめろ！」

「亜樹子さん……初対面の人にも容赦ないんですね」

そう、そこにいたのは鳴海探偵事務所（自称）所長の鳴海亜樹子さんだった。

「だまらっしゃい翔太郎くん！それとその人誰？なんで私の名前知ってるの？」

「初めまして。僕は星雄聡里。今日付けで翔太郎さんの助手になりました。」

これからよろしく願いします、鳴海亜樹子所長。」

「……翔太郎くん、どつからこんな有能な助手拾ってきたの？」

さらりと人を物みたいに言わないでください、亜樹子さん。

「そんなことよりいいかげん突っ込みを手加減しやがれ！」

「何よ、やるかこの〜！」

「喧嘩はやめて下さいってば〜！」

そんなこんなでどたばたしていると、事務所の入り口のドアが開いた。

「あの……」

その声を掛けかけて、中で起きているドタバタを観て呆然とする女性。

「亜樹子おおおお！」

「いいかげんに……って、お客さん！」

こんな状況でも気づくとは亜樹子さん流石です。

「す、すみません、探偵事務所と間違えました！」

「「ま、待つて待つて！」」

そして、全員そろって唱和する。

「『探偵事務所です!!』」

「連続風車破壊事件?」

「はい、そうですね」

依頼人の女性の名前は、かざまつりあおい風祭葵さん。

彼女は風都に無数にある風車を作ったり修理したりしている、

かざまつりあおい「風祭風工業」の社長の娘さんである。

「最近、町で過剰発電で壊れる風車の数が激増しているんです」

「過剰発電?どういうこと?」

亜樹子さんは良く判っていないらしい。

「はい、説明しますね。元々あの風車は普通の風力発電装置を小型化したもので、

風都に吹き続ける風を利用して発電するものです。

ですが、あまりに強い風、それこそ超大型台風風の風などが吹くと、過剰電圧で配線が焼ききれたり風車そのものが壊れたりするんです。

最近それが一週間に数台のペースで壊れるといった具合で、明らかにおかしいんです」

「ほう、そいつは放っておけねえな」

あ、翔太郎さんスイッチ入った。

「困っている女性を放っておくのはハードボイルドとは言えないかな。

それに、風都の象徴の風車を壊して回っている奴がいるとしたら、そいつはこの風都を泣かせている。そんな奴は、この俺が放っておけねえ。

この依頼、受けさせてもらう」

「ありがとうございます、左さん!」

「良いつて事さ。俺たちの専門分野という気もするしな。それじゃ、

何かわかったら連絡入れるぜ」

「はい、よろしく願います。では、また」

そう一言言い、風祭さんは帰っていった。

「連続風車破壊事件、かあ……何でそんなことするんでしょう、翔太郎さん」

「わからねえ。だが、

瞬間的に、かつ局所的にそんな台風も超えるような風を吹かせることは普通はまず不可能だな」

「ということは……ドーパント、ですか」

「そういうことになるな。うっし、まずは風車が破損したところに行ってみるか。資料は持ったな？」

「はい、翔太郎さん！あ、それとフィリップさんに一言声掛けて行きましょう。」

たぶんまだメモリーメモリをいじってると思うので」

「そうだな、地下に入るか」

とまあ、そんなこんなで地下室に入った僕らが目にしたのは、ぶっ倒れているフィリップさんだった。

「フィリップうううううう！？」

「フィリップさああああん！？」

どうしてこうなった。

そして二人して介抱し、ようやく目を覚ましたフィリップさんは、

「……面白い！ゾクゾクしっぱなしだよ！！」

「「開口一番それかよー！！」」

こんな状態である。

しばらくして落ち着いたフィリップさんから僕らはメモリーメモリのことを教わった。

「聡里くん、君のメモリからアクセスできる本棚は、僕が入れる物

とは独立していた。

そして、中の記憶も大半が封印されている状態みたいなんだ」

「え、そうなんですか？」

変身したときに違和感があると思った。そういうことなのか。

「だが本のタイトルくらいはわかった。でも、そのタイトルも意味がわからない単語ばかりなんだ。

これから言う言葉、あるいは名前に心当たりがあったら言ってくれないかな？」

「はい、どんな単語なんですか？」

「ああ。クウガ、アギト、龍騎、ファイズ、ブレイド。

それから、響鬼、カブト、電王、キバ、ディケイド、オーズという単語なんだけどね」

「え、それって！」

むしろ心当たりしかないよ、これは。

「なんだ、一体何の記憶なんだ？」

「えーっと、ですね……僕や翔太郎さんとフィリップさん以外の、ライダーの名前です。

それも、結構最近のライダーですね」

「へえ……興味深いね。だけど、僕もこのメモリのプロテクトは解除できなかったんだ。

だけど、まったく新しいメモリガジェット的设计図データが入っていた。

これから製作してみるよ。」

「本当ですか？なんでガジェットのデータが……？」

まあ、考えていても始まらないか。って、何か忘れてるような……あー！

「翔太郎さん、依頼のこと！」

「おつといけねえ、忘れてた！フィリップ、俺たちはこれから依頼された事件の捜査に行つて来る。

メモリーメモリはもういいか？」

「ああ、翔太郎。メモリーメモリに僕側からリンクを作ったから、これからは僕の本棚側からいつでもアクセスできるし、

メモリーメモリから僕の本棚が閲覧できるようになっているはずさ。メモリのほうは聡里くんに戻すよ」

「便利なもんだな。じゃ、行くぞ聡里！」

「了解です、翔太郎さん！」

そして、僕たち二人は風都で捜査を開始した。

途中なんか見覚えのある人が魚屋さんで小指を魚の口に突っ込んでいたり、木の上に自転車ごと引っかかっていた不幸な人を助けたりしつつ風車が壊れた場所を見ていくと翔太郎さんが共通点を発見した。

「デートスポット、ですか？」

「ああ、ウオッチャマンやクイーンとエリザベスに聞いて判ったんだが、風車が壊された場所の近くは有名なデートスポットがあつてな、風車が壊された関係で人を近づけないようにしたらしい」

「と、いうことはもしかして？」

「ああ、他人の恋愛を妬ましく思っている奴だな犯人は。だが、あと一箇所壊されていない有名なデートスポット、それも特大のがある」

「それってまさか、『風都タワー』、ですか？」

「その通りだ、さすが助手だな。犯人は大体、週末や祝日に事件を起こしている。ちょうど今日は金曜、風都タワーに張り込むぞ」

「わかりました。フィリップさんに連絡して、犯人がどこから行動を起こすのか検索してもらいましょう！」

と、言うわけで鳴海探偵事務所に戻ってくるとフィリップさんは嬉々として変わった形のノートパソコンと携帯を操作していた。

「フィリップ、検索だ……って、なんだそりゃ？」

「ああ、翔太郎に聡里くん。いいところに来たね。メモリガジェットが完成したよ」

「本当ですか！どこにあるんですか！？」

そう僕が聞くと、フィリップさんはおもむろに二本のギジメモリを取り出した。

そして、ノートパソコンと携帯にそのギジメモリを挿入した。

「紹介するよ。彼らが新しいメモリガジェット、『マンタレイライブラリ』と『ホークフォン』だ！」

「MANTAREY!」「HAWK!」

ガイアウィスパーが鳴り響くと、パソコンと携帯が変形してマンタと鷹になった。

「おお、コイツが新しいメモリガジェットか！」

「すごい！ありがとうございます！」

「さらに、マンタレイライブラリにはメモリーメモリからのデータ読み込みもできるようにしてある。

一応、キーワードがあれば検索もできるようになっているから、役に立つと思うよ。

「どうかな、彼らは？」

さ「……」↑感動で言葉すら出てこなくなっている

翔「……」↑驚愕で固まっている

1分後

「あゝ、フィリップ、検索だ。頼めるか？」

「もちろんさ。……さあ、検索を始めよう。キーワードは？」

「キーワードは、『風都タワー』、『攻撃』、『隠れ場所』だ」

そのキーワードで、フィリップの検索結果がある程度絞られた。だが絞りきったほどではない。

「駄目だ翔太郎、絞り込みきれない。他にキーワードは？」

「あ、フィリップさん！キーワード追加、『風圧』！」

その一言で、フィリップの検索が一冊の本に絞り込まれた。

「ああ、検索完了だ！ナイスだよ聡里くん！」

翔太郎、結果は風都タワーの裏側の廃工場だ。そこで張り込みしていれば、ドーパントが現れるはずだよ」

「ありがとよ、フィリップ。んじゃ、ちよつくら行って来るぜ」

僕と翔太郎さんは、メモリとドライバーを持ってその工場へ向かった。

そして時間は過ぎて翌日の深夜二時ごろ。丸一日張り込んでいたけれど犯人はまだ現れていない。

「翔太郎さ〜ん、アンパンと牛乳買って来ましたよ〜」

「助かった、これまでは買い込んでから見張りするしかなかったんでな」

「いえ、お安い御用ですよ……！来た！翔太郎さん、これ！」

僕はそう言って翔太郎さんにPCモードのマンタレイライブラリの画面を見せる。

そこにはホークフォンの暗視カメラから転送された映像が映っていて、工場の入り口から入ってくる一人の冴えない男が写っていた。

「でかした聡里。気づかれないようにアイツに近づくぞ」

「アイ・アイ・サー」

闇にまぎれて動くのって小さいころからなんかワクワクするね。

「犯人サイド」

「くっそ、クリスマスなんかなくなっちまえ！デートなんかさせるかよ！」

暴言を吐く彼は冴えない容姿と陰気な性格のせいで、まったく女性に興味を持ってもらえなかった。

そして男は、クリスマスをブチ壊すというその考えに取り憑かれ、禁断の力、ガイアメモリを手に入れてしまった。

そしてその男はスタートアップスイッチを押し、メモリを起動させ

る。

「AIR!」

「デートスポットなんて、壊れちまえばいいんだ!!」

そう吐き捨て変身しようとした瞬間、工場内に声が鳴り響いた。

「おおっと。そんなことさせると思うか？」

「思い通りにはさせませんよ!」

「!」

（聡里サイド）

ドーパントにセリフを投げつけながら登場する翔太郎さんと僕。

相手は露骨に悪意のこもった表情になり、ガイアメモリを握り締める。

「うるせえ、人が仕事するしかない日に横でイチャイチャされる方の身にもなれってんだ!邪魔すんな!」

そしてその男は、自分のひじにある生体コネクタにガイアメモリを挿入し、ドーパントへ変身してしまった。

「うわあ、ドーピングしちゃったよ」

「じゃあねえな。フィリップ、聡里!こっちも行くぞ!」「JOKER!」

「もちろんさ、相棒」「CYCLONE!」

「わかってますよ、翔太郎さん!」「MEMORY!」

「変身!」

「CYCLONE! JOKER!」

「さあ、お前の罪を数えろ!」

「変身!」

「MEMORY!」

「貴方の記憶、見せてもらいます!」

『翔太郎、あのドーパントは『エア・ドーパント』。空気を操る力を持っていて、

かまいたちを飛ばして攻撃するらしい』

「だったら、このメモリだ！」

そう言い、翔太郎さんは左側、ボディサイドのメモリを変更する。

「TRIGGER！」

「CYCLONE！ TRIGGER！」

「サイクロントリガー……だったら僕も！」

そう言いつつ、僕はメモリーメモリをベルトから抜き、ウェポンスロットに装填する。すると左胸の位置にメモリーの装甲と同じ色のトリガーマグナム、メモリーマグナムが現れる。

「行くぜ、空気野郎！」

「空気って言うんじゃない！」

そんなことを言いつつ、ドーパントはかまいたちをWに向かって飛ばす。だが、Wはやすやすとかわして風の弾丸を敵に撃ち込む。

「てめえ、いいかげんにしやがれ！」

「僕も忘れてもらっちゃ困りますよ！」

ドーパントに言い返しつつ、僕もメモリーマグナムで敵を射撃する。

「ぐあああああ！？……なーんてな」

「『何！？』」

その瞬間、まるで砲撃のようにものすごい風圧がWとメモリーに襲い掛かる！

「『あああああッ！？』」

その攻撃で、Wとメモリーは工場の壁を突き破り外へ放り出される。

「今の攻撃、なんだってんだ！？」

『あの攻撃は風……もしかして』

「ええ、フィリップさん。おそらく空気を圧縮してから一方向へ一

気に開放したんでしょう。となると、直撃すればけっこうヤバいですよ」

そんな感じで、僕らはドーパントの攻撃を回避しながら話し合っていた。

「……翔太郎さん、フィリップさん。一つ思いついた打開策があるんですけど」

そう言っ、僕は翔太郎さんとフィリップさんに作戦を伝える。

「どういうことだ？」

『ああ……なるほどね』

「ってわけで、協力お願いします！行きますよ、ボス！」

「ボスっておい……まあいいか。作戦は良く判らねえがやるぞ、フィリップ！」

『もちろんだとも、翔太郎』

そして、Wは『ハードボイルダー』、僕は僕のバイク『メモリーボイルダー』に乗ってある所へドーパントを誘導して行く。

「てめえらチョコマカ逃げ回ってンじゃねエエエエエエ！」

ドーパントは風を背中側から噴出しバイクに匹敵する速度で追いつがってくる！

まあ、追って来てくれないと、作戦自体成立しなくなるんだけど……

そして半時間かけて、ドーパントを狙い通りの場所、港まで連れて来た。

「や、やっとたどり着いたぜ……」

『途中、竜巻で上空に打ち上げられたときはどうなるかと思ったよ

……』

「で、でも目的地には着きました！後は……！」

「おう！コイツで決めるぜ！」

「JOKER!」

「CYCLONE! JOKER!」

そしてサイクロンジョーカーに変身したWは、サイクロンサイドの能力で竜巻を巻き起こしドーパントの攻撃を吸収・無効化する。

「なんだと!? 俺の砲撃を取り込んでやがるのか!」

「当たり前だ! お前なんかの風が相棒の疾風サイクロンに敵うか!」

『まあ、当然の結果だね』

そしてWは、その風を纏った右腕でエア・ドーパントを上空へ殴り上げる!

「がはっ!? だが俺はこんな攻撃では……」

「誰がそれだけって言いましたか!」

「MEMORY!」

「メモリーシャフト! いっきまあす! 即興技、ライダーバッティンググ!」

「ぐああああ!?!」

僕は打ち上げられたドーパントをメモリーシャフトでバッティングするように打ち、海の中に叩き込んだ。

「くっそ、あいつら! 砲撃してや……ッチ!、空気がねえ!」

そう、僕がWに伝えた作戦とは、『ドーパントを水中へ沈める』というものだった。

メモリーの力を使ってドーパントの能力を検索した結果、エア・ドーパントの能力が『接触している気体を操る』という物だったから、『気体に接触しない状況』を作り出せば良いと思い、この作戦を考えついて翔太郎さんとフィリップさんに教えたんだ。

「翔太郎さん、フィリップさん! 仕上げ行きますよ!」

「ああ!」

そして二人揃ってメモリを取り出し、マキシマムスロットへ挿入す

る。

「JOKER! MAXIMUMDRIVE!!」

「MEMORY! MAXIMUMDRIVE!!」

「まずは……その場に縫いとめる!」

そう叫び、メモリーシャフトをドーパントへ投げつけ、突き刺してその場に足止めする。

「ガアアアツ!? 動けねえ!!」

「メモリー! 同時に決めるぞ!!」

「了解です、翔太郎さん!」

「『はあああああつ……!!』」

気合を込め、僕ら二人は上に飛び上がる。そして、メモリブレイク!

「『ジョーカーエクストリーム!!』」

「メモリークラッシャー!!」

Wが左右に分離しキックを叩き込み、僕はドーパントに突き立てたメモリーシャフトを相手に突きこむように上から踏みつける!

「貴方の罪、記憶しました」

「ぐあああああああああッ!!」

断末魔の叫びと共にエア・ドーパントは爆発し、メモリが排出され砕け散った。

「事件記録」

「ドーパントに変身していた男はすぐに警察に引き渡しました。」

「お約束の刃野刑事さんの他に、どこかで見たような不器用な警察の人が来て犯人を連行していったけど、なんだったんでしょうね?」

「それはそれとして。女の人に気づいてもらえない程度の事でドーパントなんて、アブない人でした。」

「まあ、なんでも、いいですけど。翔太郎さんは、どうやら風祭さ

んにいいところを見せたかったみたいですネ。」

「でも、婚約しているとわかってすごい落ち込んでました。さすがハーフボイルド。」

「そして、明らかになったガイアメモリ販売員の特徴。」

「赤いシミのあるスカートの男、だそうです。一体どういう人物なんでしょう。」

「それはともかく、これからも、僕は翔太郎さんたちに協力させてもらうことにしましょう。」

「……こんなものでいいかな。ありがと、マンタレイ」

僕は、マンタレイライブラリに事件の記録を入力するのを終えて、自分で淹れた紅茶（砂糖少な目のミルクティー）を静かに飲む……つもりだったんだけど。

「亜樹子おおおおお！」

「ぶっふう！」

思わず吹いちゃった。何事かと思って見に行くと、そこでは。

「俺のプリン返せ！」

「もう食べちゃったも〜ん」

「じゃあ弁償しやがれえええ！」

と、喧嘩している探偵（二十四歳）と女性（二十歳）。誰かは言わずもがなでしょう。

「翔太郎さん、亜樹子さん……」

「え、聡里くん……？」

「ちょ、おい落ち着け！」

ハリセンを構える僕に対し、あっけにとられている亜樹子さんとオドオドしだす翔太郎さん。

「僕は本来、あんまり手は上げないんですけどね……？」

第二話：Mの邂逅／聖夜の攻防（後書き）

作者「はい、というわけで第二話でした！」

聡里「なんというか、ハチャメチャな動機ですね」

作者「本編でも似たようなノリがあつた気がするけどな。

でも、おまえにはわからない悩みだろうな、女に縁が無い
つてのは」

聡里「どういう意味ですか？」

作者「だつてお前、元の世界ではよく従兄弟とじゃれあつてたじゃないか。あれはどう説明するよ？」

聡里「あれは僕がおもちゃにされていただけです。そんな感情、
あつちにあるわけじゃないですか」

作者「はいはい朴念仁朴念仁」

聡里「もうっ！そんなことはいいいからいろいろ紹介いきます！」

「メモリガジェット」

マンタレイライブラリ

マンタ PCで変形するメモリガジェット。

ギジメモリは「マンタレイ（MANTAREY）」。

ホークフォン

鷹 携帯に変形するメモリガジェット。
ギジメモリは「ホーク（HAWK）」。

「マシン」

マシンメモリーボイルダー

ハードボイルダーがグリーンクリスタルカラーになったもの。

ハードボイルダーの換装ユニットと規格が共通で、

タービュラ・スプラッシャー・スタートダッシュユニットやガンナ
ーAもそのまま使える。

聡里「こんなものですかね。だんだんデータまとめるのにも慣れて
きた気がします」

作者「さて、ここで皆様にちょっとばかりお知らせを。これから、
感想で『お土産』といった形で出して欲しいアイテムがあれば書いて
下さると、そのアイテムをもしかしたらこちらで使うかも？」

聡里「アイテムはライダー以外でも、たとえば『ライトセイバー』
とか『ホレ薬』とかでもなんでもかまいません」

作者「基本このあとがき劇場（仮）で使いますが、もしかしたら本
編にも出すかも？」

聡里「作者の勉強にもなるので、是非お願いします」

作者「それじゃ、次回予告行くか！」

聡里「了解です！」

「次回の、記憶のライダーは」

フィリップ「復讐代理人？」

???「この街には悪意が満ち満ちている！」

翔太郎「しまった、俺のメモリが！」

聡里「翔太郎さんのメモリを返せ！」

???「俺も、人の心を救うもの……仮面ライダーだ！」

「次回：Vの暴走／ライダーの資格」

作者・聡里「これで決まりだ!!」

第三話：Vの暴走／ライダーの資格（前書き）

作者「前回までの『記憶のライダー』は！」

聡里「ここは……風都!？」

翔太郎「お、お前は？」

フィリップ「僕たちのことを知っている? いったい何者なんだい？」

聡里「僕は通りすがりの……じゃないけど、仮面ライダーメモリー！
助太刀します！」

聡里「貴方の事を、記憶しました。」

第三話：Vの暴走／ライダーの資格

「記録（某月某日）」

「風都に飛ばされて今日でもう一週間」

「あいかわらず鳴海探偵事務所は、閑古鳥の巣窟になっています」

「依頼人はこの一週間で一人。それもペット探しというものでした」

「おかげで事務所は今日も赤字。ご飯も切り詰めてギリギリと言う状況です」

「そこで僕もアルバイトを始めることに決めました」

「翔太郎さんたちには大丈夫だと言われましたけど」

「『働かざるもの食うべからず』ですし、僕も働かないと」

「そんなこんなで職探しをしていたんですけど」

「どこも雇ってくれる余裕は無いようで、途方にくれていると」

「一人の男性に呼び止められました」

「その人はおでん屋さんだそうで、」

「僕がよっぽど気落ちしていた顔をしていたんでしょう、」

「相談に乗ってくれました」

「話を聞いてくれたその人は、唐突に「俺が雇おう」と言い出したんです」

「僕は迷惑だろうと言ったのですが、」

「なんでもおばあさんが困っている人は放っておくなど言っていたそうなので」

「むしろ強引に雇われてしまいました」

「そのお店の名前は『天道屋』。とても美味しいおでんを作っているお店です」

「さて、明日もがんばってアルバイトしないと」

「天道さん、テーブル磨き終わりましたよ。次は何をすればよろしいですか？」

「ああ、次は椅子をきちんと並べてくれ。

お客様に気持ちよく食べていただけるようにな」

「了解です」

「いいか聡里、おばあちゃんが言っていた。

『病は飯から。食えるという字は、人を良くすると書く』ってな。

俺の作った飯を気持ちよく食べていただく。それがこの『天道屋』だ」

「はい、承知しています。天道総司さん」

「ならいい。さあ、もうまもなく開店だ。準備を急げ」

「はい！椅子並べてきます！」

こういった感じで二、三日前からバイトをしています。

店主は天道総司さん。『おばあちゃんが言っていた』が口癖で、なにか不思議に惹かれる人です。

綺麗な妹さんの樹花^{じゅか}さんも元氣にお手伝いしているようで、正直僕がいるのが場違いのような気がします。

……でも、天道さんってどこかで見たことあるような……？

そんな風に考え事していると声を掛けられた。

「……聡里、聞いているのか？」

という天道さんの声で我に帰る僕。しまった、仕事だった！

「あ、すみません。ちよっと考え事をしてしまって。何の話でしたっけ？」

「お前の給料の話だ。お前は中々物覚えがいい。

少し給料を上げてやっても良いと思ってな」

「そ、そんな。雇ってもらえただけでも大助かりなのに、良いですよ。

……あ、でも」

「なんだ？言ってみろ」

「これから家に帰るときこのおでんを少し戴いて帰っていいです

か？

「ここのおでんが食べられるなら事務所のみんなも喜ぶと思うので、そう僕が言つと天道さんは少し驚いたような顔をして、

「事務所？何の事務所だ？」

と聞いてきた。そういえば言つてなかったかな。

「鳴海探偵事務所つて言う探偵事務所で助手兼雑用をさせていただいてるんです、

住み込みで。ちょっと事情があつて実家に帰れないもので。はいこれ名刺です」

そう言つて僕は事務所で作つた名刺を差し出すと、天道さんは納得したようだった。

「なるほど。その事務所の経営はうまくいってはいないようだな」

「はい、そうなんです。といっても、お客さんが居ないだけなんですけど」

「腕自体はいい、ということか。判つた。

俺も何か困つたことがあれば相談させてもらおう」

「え、本当ですか？でも、天道さんなら大抵の事は解決できてしまひそうなの……」

「フ、確かに。だが、一人では限界があるというのもまた事実だ」

「ええ、確かに。それは痛感します」

「だが、この事務所なら大丈夫そうだ。何せ、『風都の守護者』だからな」

「はい。……つて、え！？」

天道さん、まさか翔太郎さんたちのことに気づいてる……！？

「天道さん、あなたは……」

「おつと聡里、時間はいいのか？仕事も終わったことだ。今日はもう帰るといい」

そう言い切られては、粘ることはできなかった。

「明日もよろしくおねがいします」

「こちらこそだ。それから、これを持って行け」

そういつて渡されたのは、天道屋のおでん（四人前）だった。

「ありがとうございます」

そう返事をし、僕は家路に着いた。

そして事務所について、中に入る寸前に気がついた。

（天道さんはなんで四人だつて知ってるの！？）

天道さん、おそるべし……

「「う・ま・い・ぞおおおおお！」」

「これがおでんという食べ物か……とても興味深い。早速検索を！」

「食事中に検索はお行儀が悪いから食べ終わってからにして下さい！」

味王様みたいになっている翔太郎さんと亜樹子さん、

検索モードに入ったフィリップさんがにぎやかな中で、

僕は少し考え事をしていました。

（天道さんはなんでこの事務所の事を知ってるんだ？

それに、見たことあると思うのに思い出せない……まさか）

そこまで考えた所で、亜樹子さんが僕に話を振ってきた。

「聡里くん、いいアルバイト先見つけたね。」

こんな美味しいおでん食べたのは初めてだよ！」

「ああ。今度食べに行きたいな。なんて名前の店だっけか？」

「天道屋っていうおでん屋さんですよ、翔太郎さん。知ってますか？」

「いや、知らねえな……」

「ごちそうさま！さあ、検索を始めよう！」

そっつい速攻でガレージに入ろうとするフィリップさん。

「フィリップさん！食器を洗って下さい！」

「えー」

「い・い・で・す・よ・ね？（ハリセン装備）」

「判ったよ。聡里くん」

その一言と共に自分の分の食器を持って台所へ直行するフィリップさん。

「（聡里くんって怒ると怖いよね……）」

「（ああ、キレたときのアイツの背後にはおやつさん以上の脅威が見えるぜ……）」

「ん、翔太郎さん、亜樹子さん。お二人とも、何か言いましたか？」

「いえなんにも」

「？」

その翌日。僕が天道さんにもらったおでんの食器をもって天道屋へ向かっていると、

いきなり柄の悪い男の人がプレハブ倉庫の壁を突き破って飛んできた！

「ッ！？大丈夫ですか！！」

僕がそう声を掛けるけれど反応はなし。

脈はあったから生きているけれど全身打撲くらいか、もっと酷いか

……

「貴様、私の仕事の邪魔をするな。どけ」

そっぴい現れたのは……

「ドーパント！」

そっ、流線型で空気抵抗が少なそうなデザインをしたドーパントが、大股でこちらに向かって歩いて来ていた。

「俺はその男への『復讐』を代行しに来た。邪魔をするな」

「そんなことできませんね。本人にさせればいいでしょう、復讐な

んて！

それに、ドーパントなら放って置けませんしね！」

そっくり、僕はロストドライバーMとメモリーメモリを取り出す。

「お前、そのメモリ、それにベルトは！？」

「MEMORY！」

「行きますよ……変身！」

ロストドライバーMの、

通常のロストドライバーとは逆にある変身用のスロットに

メモリーメモリを左手で挿入。

そのあと左手の指をピストルのような形にして左下から右上に向かって伸ばし、

右手を左下に降ろしつつベルトを展開、変身する！

「MEMORY！」

僕を地球の記憶の光が包み、それが結晶となって装甲が形成され変身が完了した。

「お前が……仮面ライダー！」

「といっても、助手の方ですけどね。さて、貴方の記憶、見せてもらいます！」

決め台詞と共に僕は走り出す！

「破ッ！」

掛け声と共にパンチを叩き込もうとしたけれど、

振り切った瞬間にはすでにドーパントはそこには居ない。

「なっ、何処に！？」

「ここだ、ここ」

言い放ったドーパントは、僕の後ろに立って回し蹴りのモーションに入っていた！

「しまっ……！？」

「させるかよ！」

その声と共に横から緑色の風の銃撃が飛んでくる。この攻撃は！

「翔太郎さん、フィリップさん！やつと来ましたね！」
僕がそう叫ぶと、

ハードボイルダーで駆けつけたWはホークフォンを取り出してきた。

「ああ、お前が知らせてくれなかったら気づかなかったぜ」

『咄嗟にホークフォンに伝令させるとは、よく考えたね』

「そんなことより、今はコイツを！」

「『ああ！』」

そしてW・サイクロントリガーはドーパントを攻撃しようとするが、高速移動で回避されてしまう。

「なんだコイツは、物凄え速さだぞ！？」

『落ち着きたまえ翔太郎。こういうときは、このメモリで行こう』

「LUNA！」

「ああ、そうだなフィリップ。行くぜ！」

「LUNA！」「TRIGGER！」

ガイアウィスパーが鳴り響くと共にWがハーフチェンジ、W・ルナトリガーになった。

「行くぞ、聡里！」

「はい、ダブル！」

僕もメモリーマグナムを装備し同時に射撃をかける。

僕の牽制でドーパントが逃げたところに、ルナトリガーの射撃が迫る！

「クッ、こうなれば『あれ』を使いますか……！」

そついうと、ドーパントはある『メモリ』を取り出した。

「やった……のではないみたいです」

「ああ……アイツ、どこに行きやがった！？」

射撃は確かに着弾したと思った。

しかし、着弾地点にはドーパントの姿も、被弾の痕跡すらなかった。
その時、なにかが恐ろしい速さで接近し、僕とダブルを吹き飛ばした！

「かはっ……！？」

「ぐあぁっ！？」

『翔太郎、大丈夫かい！？』

そう、高速移動してきたのはドーパント。しかし、速度が明らかにおかしい！

「まさか、このメモリまで使う羽目になるうとは……仮面ライダー、侮れん」

その手に握られていたものは、ガイアメモリ。

しかし、そこに書いてあった文字は……

「『ワーム』……だって……？そんな馬鹿な！」

「どうした聡里！あのメモリがどうかしたのか！」

「フン、教えてやろう。このメモリは『パッチメモリ』と言い、

ドーパントに更なる能力を与えるものだ。このメモリは『ワームメモリ』。

超高速移動・クロックアップを可能にするものだ。

これがある限り、お前たちは私には勝てない」

「クロックアップ、だと？」

『そんなメモリ、有り得ない！第一僕の本棚にもそんな記憶は……』

「いえ、フィリップさん。その記憶は本棚にあります。メモリーの方」

僕がそういうと、

メモリーメモリ側の本棚にある、一冊の『本』のロックが外されようとしていた。

『……これは、『KABUTO』の記憶？』

フィリップさんもその感覚を感じ取ったようだった。

「ええ。そのライダーの敵の力なんですよ。クロックアップは」

「だが、なぜその力がドーパントのメモリに？」

「そこまでは……ッ、危ない！」

僕がそう叫んだが時すでに遅く、ダブルは胴体を攻撃され、メモリ

……

ルナメモリとトリガーメモリを奪われてしまった。

『しまった、僕たちのメモリが！』

「ルナトリガーになれなかったらあのスピードに追いつくのは無茶だぞー！」

「いえ、たとえルナトリガーでもかなりキツイですよ……！？」

その時だった。横合いから『赤い影』が翔けて来たのは。

「なんだと！？他にもワームメモリの使用者が！？」

そうドーパントがうるたえるが、違う。

「あれは……クロックアップシステム。」

ワームのクロックアップをシステムで再現した、仮面ライダー」

「あれが……ライダー？聡里、どういうことだ！」

『聡里くん、あのライダー、わかるかい？』

「僕らのようなガイアメモリで変身するのではなく、

ゼクターと呼ばれる虫型メカによって変身するメカライダー、あれが……」

その影は僕らとドーパントの中間の位置に立ち止まり、こちらを見る。

「……カブト。仮面ライダーカブト！」

『カブト……あれは誰なんだ？』

「おい、お前誰なんだ！？」

翔太郎さんの質問に、カブトは天を指差す。

「え？この仕草は……！」

それを以前に見たのは、数日前、天道屋の前。

『あなたは、誰ですか？』

『俺か？俺は、天の道を往き……』

「……総てを司る男」

そうして、カブトはこちらを向き、答える。

「天道総司」

その台詞を聞いた瞬間、僕の脳内で記憶が溢れ返る。

「ッ！くうっ……思い出せた。カブトの……記憶を！」

「く、相手もクロックアップが使えるとは！ここは一旦！」

ドーパントはクロックアップを使い逃走していった。

「おい待ちやがれ、ドーパント！」

『待つんだ翔太郎！』

今後を追ってもルナとトリガーのメモリがない以上圧倒的に不利だ！』

フィリップさんの一言に、翔太郎さんも追おうとしていたのをやめる。

「くっそ、油断したぜ……」

『だが、まさかあんな能力があるとは想定できなかった。それよりも、まずは』

「ああ、天道とかいうあの男だな」

その後、僕らと天道さんは鳴海探偵事務所に集まっていた。その理由はドーパントの対策を考えるためである。

「なあ、あんたの能力であっちのクロックアップに対抗できないのか？」

と、翔太郎さん。

「生憎、今のカブトは能力の大半を封じられている。

俺は元々別の世界の住人だったが、俺の世界の戦いは終わっていないからな。

この世界での生活を楽しませてもらっている。

幸いといえるのか判らないが家族も全員一緒だからな」

あくまでも我が道を往く天道さん。さすがというかなんというか。

「まあそれはいい。だが、俺も有事の際には協力させてもらおう」

「いいんですか、天道さん。けっこう危険ですよ、ドーパントは」

「クロックアップに比べれば軽いものだ」

「それは確かに」

と僕&翔太郎さん&フィリップさん。

なんせ神速ライダーとその敵だから、説得力がある。

あ、ちなみに今所亜樹子さんは絶賛情報収集中です。

街中で聞き込みしてます。

「それにしても、カブトか。興味深いね。もうすこし詳しく調べたいものだけど」

「あ、だったらデータ出しますよ？」

「ええっ!？」

答えた僕に、驚くダブルコンビ。

「フィリップさんの作ってくれたマンタレイライブラリの機能を使います。」

さあて、起動、っと

僕はマンタレイライブラリをPCモードで起動、メモリスロットにメモリーメモリをセットし、『ライブラリモード』を起動する。

「ライダーズデータ呼び出し、まずは『マスクドライダー』！」
そのコールと共に音声認識でデータが検索され、ライダーの概要が表示される。

「マスクドライダーシステム。」

未知の生命体『ワーム』に対抗するために

『ZECT』という組織により作り出されたシステム。

装甲は未知の金属である『ヒビロノカネ』によって構成されている。

一段階目の変身は『マスクドフォーム』と呼称されており、重装甲による高い防御力を誇る。

これは一部のみ排除・装着といったことも可能。

この形態から外装甲を排除、高機動形態になる

『キヤストオフ』により『ライダーフォーム』に変化する。

キヤストオフ後のライダーフォームの特徴は、

タキオンエネルギーにより時間流を操作し、

擬似的な超高速移動を生み出す『クロックアップシステム』。

クロックアップシステムはワームの能力である

クロックアップに並ぶシステムとして製作され、

唯一対抗が可能と言われているシステム。

また、変身ツールであり、コアである『ゼクター』と呼ばれる昆虫型メカが

意思を持っており変身者を選ぶのも特徴の一つで、殆どのゼクターのモチーフは昆虫になっている。」

「凄いものだね、まるで僕の『検索』みたいだ」

「ああ、メモリーメモリの検索は聡里の独壇場だな」

「俺たちのデータがここまで集められている？なぜここまで……」

「それは僕にもさっぱり。じゃあ次行きます。」

検索項目、『仮面ライダーカブト』！」

そうコールすると、また情報が検索、表示される。

「仮面ライダーカブト。」

カブトムシがモチーフのマスクドライダー。

誕生の詳細を知るものには『光を支配せし太陽の神』と呼ばれる。

必殺技数が16と平成ライダー中でも多い。装着者は天道総司。

ハイパーゼクターを使いこなすライダーであり、

そのシステムにはワームを装着者の意思に関係なく完全撃破する、

『暴走スイッチ』が搭載されている。」

「……こんなところです。データはフィリップさんの側にも送っておきました」

「ありがとう、聡里くん。こんどゆっくり閲覧させてもらうよ」

「に、してもあのドーパント、厄介だな。」

どうにかして正体を突き止めて、メモリを取り返さないと」

「ああ。俺も安心して店を続けたいからな」

「そういえば、天道さんはどうしてあのドーパントを追っていたんですか？」

僕の疑問に天道さんは答える。

「どうやら、俺に恨みを持った奴がいるらしくてな。俺も狙われた。」

一応追い払いはしたのだが、まだ狙われているらしい。

だが、おばあちゃんが言っていた。

『この世にまずい飯屋と悪が栄えた試しはない』ってな。

必ず捕まえることができるだろう。では、俺は店に戻らせてもらおう。

「商売があるからな」

天道さんは立ち上がり、お店に戻ろうとした。

「あ、僕も行きます」

「いや、お前はあのドーパントとやらを探してくれ。

これは『依頼』だ。頼めるな？」

「！……判りました。その依頼、受けます！」

僕がそういった瞬間、後ろからスリッパが振り下ろされる。

「あつぶな！？」

ギリギリ回避成功！

「かわされた！？じゃなくて聡里くん！

そういうことは私たちに一言相談してからにしないで！

……でも受ける！」

「亜樹子さん、ありがとうございます！」

「えゝ、それで依頼量の方は……」

……さすが亜樹子さん、関西人だな。お金の事はしっかりしてる。

「ああ、この位でどうだ？」

天道さんが金額を書いて渡した依頼書をみた亜樹子さんは、目を丸くしていた。

「ホントにいいんですか！？こんなに！？」

「勿論だ。うちの店の窓ガラスを割った奴に対して、言ってやりたいことがあるからな。

捕まえるときには呼び出してくれ。頼んだぞ」

そっくり、今度こそ天道さんは帰っていった。

続く

第三話：Vの暴走／ライダーの資格（後書き）

聡里「第三話にしてこの長さ、そしてまさかのカブト登場ですよ」

作者「長いのは気にしないでくれ……」。

それと内容はコックローチのエピソードが特に面白くてなー。
あのメモリの正体は次回で」

聡里「でも、クロックアップはチートでしょ本当に！

しかも天道さん能力弱体化してるし！
本当に倒せるんですかあんなの！？」

作者「それは次回のお楽しみだ。さて、今回はメモリーメモリの
新たなる能力が明らかに？」

聡里「Σマジですか！？」

天道「大マジらしいな」

聡里「うおっ、天道さんいつの間に！？」

天道「ついさっきクロックアップでな」

作聡（何でもありだなこの人……）

天道「さて、次回の予告でもしたらどうだ？」

聡里「あ、そうですね。それじゃ作者さん、お願いします」

作者「おう。

次回、記憶のライダーは！」

ドーパント「俺はこの風都の恨みを晴らす正義だ！」

天道「おばあちゃんが言っていた……

『刃物を握った手で人を幸せにできるのは料理人だけだ』
つてな」

聡里「貴方の仕事はお終いです、復讐代理人！」

翔太郎「お前の正義はこの街を泣かせる！」

フィリップ「仮面ライダーとして、放って置けないね！」

聡里「いきますよ、皆さん！」

四人「『『変身！』『』『』」

作聡「これで決まりだ！」

第四話：Vの暴走／天の道を往く神速（前書き）

作者「やっと書き終わったぜ、四話……」

聡里「早くもスランプですもんね、それにいきなり天道さんを出すからですよ？」

作「わかってるさ。だがこれも浪漫なんだよ、浪漫」

聡「その浪漫で書けなくなったら意味がないですけどねー」

作「ガハッ!？」↑ハートにタマシーコンボの必殺技

聡「あ、クリティカルで気絶しちゃった。」

それでは、本編の方、お楽しみ下さいね」

第四話：Vの暴走／天の道を往く神速

ドーパントにメモリを奪われ数日が経ち、

今日も鳴海探偵事務所に僕らに加え天道さんが集まりドーパント対策を考えていた。

「また謎の破壊活動があったって、風都日報ウェブのトップラインにありますよ。」

この数日で五件目です。今回は高利貸しの会社のビルが破壊されたとか」

「そうか。ありがとな、聡里。犯人はまたあのドーパントだろうな……。」

フィリップ、あのドーパントの正体は掴めたか？」

「ああ、翔太郎。あのドーパントは「ベロシティドーパント」。

速度を操る能力を持ったドーパントさ」

「成程な。だからあの高速移動が出来た訳か。」

それじゃ、あの『クロックアップ』に対抗する方法は判ったか？」

「そっちは全然だね。僕らの能力で、ルナとトリガーを除いてあのドーパントに対抗する方法は無い」

Wのメモリが奪われたため、その能力には頼れなさそう。

「僕の方も、なかなか考え付きません。天道さん、なにか思いつきませんか？」

「俺も思いつかないな。だが、まずは盗られたガイアメモリとやらを取り戻すのがいいんじゃないか？」

「ああ、そうですね！……そうだ、フィリップさん！このサイト見てください！」

僕はそう言い、マンタレイライブラリでとあるサイトに接続し、皆に見せる。

「このサイトは……？」

「『復讐代理人』だあ？なんだよこのサイト」

「翔太郎さん、このサイトは『風都』『復讐』『代行』のキーワードで検索してヒットしたサイトの一つです。」

それと、このページの復讐対象リスト、どこかで見覚えありませんか？」

フィリップさんはしばらく考え込んだ後、ハツとした表情で翔太郎さんの方を見た。

「……そうか！翔太郎、刃野刑事から受け取った、例の事件の傷害事件の被害者リストだ！」

「ええ。それにこの一番下。この会社名、さっき言った記事の高利貸しの名前なんですよ！」

「決まり、だな。このサイトを運営している人間を突き止められないか？」

翔太郎さんが僕にそう聞いてくる。

「僕には流石にそこまでは。でも、一つだけ思いついた策があるんですが、これはちよつと……」

「だったら言ってみてくれたまえ。それがいい刺激になるかもしれない」

「……判りました。このサイトに、依頼を書き込むんです。僕らがターゲットになるように。」

それで相手が襲ってきたところを……」

「捕まえる、って訳か。だが、それだと被害がでくなる可能性があるな」

「はい、だからターゲットには、僕がなります」

「聡里！？お前何言ってるのかわかってるのか！？」

翔太郎さんが大声で怒鳴ってくる。

「判ってます。ですが、翔太郎さんたちにはメモリを回収してもらう必要がありますし、

亜樹子さんや天道さんに危害を加えさせるわけには行きません。

それに、あちらも僕に対しては恨みがあるでしょうから」

「だからって言うて、お前が危険だって言ってるんだ！」

「でも、他に方法は……！」

その時、僕らが喧嘩をしている横で黙ってみていた天道さんが、動いた。

「お前たち、少し落ち着け」

「「天道^{さん}……」

「おばあちゃんが言っていた。

『未熟な果物は酸っぱい。未熟者ほど喧嘩をする』ってな」

「なんだと!？」

「翔太郎さん落ち着いて！」

天道さん火に油を注がないでください！

「だがおばあちゃんはこうも言っていた。

『未熟なものでも味がある。その味を生かすのが料理人の腕の見せ所だ』と。

たしかにこの策は危険も伴う。だが、それしか手が無いのなら認めても良いんじゃないのか、左？」

「……」

さすが天道さんの『天道語録』は、重みが違う……

「……そう、だな。だが、無茶はするな。危なくなったらすぐ逃げろよ」

「判ってますよ、翔太郎さん。

……あ、ドライバーとメモリはここに置いていきます。

さすがにこれが奪われるといういろいろマズいので」

「聡里くん、さすがにそれは、それこそ君が大怪我してしまうかも

しれないよ?」

フィリップさんが言ってくるけれど、僕は首を横に振り、否定する。

「僕なら大丈夫です」

「ああ、聡里は大丈夫だ。いざとなれば、俺が行こう」

天道さんのフォローが入り、作戦は決定した。

作戦を始め、三日が経った。僕は、とある工場で野宿をしている。

件のサイトに書き込んだ僕の罪状は『不法侵入』。

勝手に廃墟に入り込んで住み着いた男で邪魔で仕方ない、という内容で書いてもらった。

そして、夕食のご飯(飯ごうで炊いた)と固ゆで卵

(人間が踏んでも割れないレベルのが一個あっただけど、これどうやって作っただろう……?)

を食べていると、いきなり声が響き渡った。

「星雄聡里だな?」

「この声は!?!」

そう、件のベロシティドーパントの登場。

「ほう、お前はこの間のヒーローもどきの小僧か。」

お前も他人から恨みを買っているようじゃないか」

「そういう貴方も、けっこう恨みを買っていますよ?」

僕がそう返すと、ドーパントは不敵に笑ってこう言い放つ。

「私は正義を成しているからな。罪人から恨まれるのも当然だろう。」

さて、星雄聡里。お前を、『不法侵入』の罪で裁く!」

「くっ、今の僕は変身できないのに……ッ!」

と、僕にできる精一杯の演技で焦ったふりをしてみせる。

ちなみに、この状況とはホークフォンで撮影していて、

犯人が立ち去るときに尾行するように命令してある。

そしてドーパントが殴りかかって来て、僕はなすすべもなく倒されることになった。

攻撃はどうか見えたけれど、ギリギリで対応するのが精精だった。

「復讐完了、か。他愛も無い」

血まみれで横たわり、動かない僕に言い放ち立ち去ろうとするドーパントに、

翔太郎さんから借りた予備のスパイダーショックの発信機をつける。これで二重に追跡できることになるか。

そしてドーパントが立ち去ると、物陰から天道さんが現れた。

「大丈夫か、聡里」

「……ええ、天道さん。勿論ですよ」

「ならいい。事務所へ戻るぞ」

「わかりました。でも、ちょっと疲れたので、寝ても、いいですか？」

そう言つて、僕は意識を手放した。

〳〵鳴海探偵事務所〳〵

「う、あ……眩しい……」

僕がそう言い目を覚ますと、そこは探偵事務所のソファの上。横では亜樹子さんが僕の様子を見ていた。

「あ、亜樹子さん」

「聡里くん！目が覚めたんだ！よかったあ……」

翔太郎くんフィリップくん！聡里くん起きたよ！」

亜樹子さんはそう叫びながら秘密ガレージへ突撃していった。

「っ、ちょっと無茶すぎたかな？まあこのくらいならどうにかなるか」

そう呟いたとき、翔太郎さんに思いっきりどやされた。

「聡里！俺は無茶をするなって言っておいたはずだよな！？」

なのにどうしてこんな血まみれになってるんだ！」

あー、そういや具体的にどうやってドーパント騙すか説明してなかったっけか。

「落ち着いて下さい。これは血糊ですよ」

「血糊！？」

「ええ。じつは、こんな物を用意していたんです」

僕は全員にビニール袋を見せる。

その袋は熱で口を接着してあり、中には血が入っていた。

「へえ、これは面白い。どうやって作ったんだい？」

フィリップさんに聞かれ、答える。

「簡単ですよ。実は数日前から少しずつ自分の血を抜いてたんです。で、それを水でうすめて固まりにくくしたんですよ。」

後はそれをビニール袋に入れて、端をアイロンで溶かしてくっつけて作りました」

「なるほどな。だが、どうやってそれをあんなだけ盛大にぶちまけたんだ？」

「それも簡単で、口に含んでビニールを噛み切った後、殴られて吹き飛んだ瞬間にそれを自分にかけてただけです。」

その後騙すのは苦労しましたけどね」

その説明に、探偵事務所の面々は心底驚いたようだった。

「……つてことは翔太郎くんフィリップくん、犯人の居場所、判ったの!？」

「勿論だ、亜樹子。発信機とホークフォンからバッチリ位置が送られて来てる。あとは乗り込むくらいだ」

「僕としても問題は無い。だが、あのドーパントの相手はできるのかい、聡里くん？」

フィリップさんに聞かれた僕は、「はい」と返事をし、首をたてに振った。

しかし、天道さんが僕の方をじっと見ていて、何かをあきらめたような顔をしていた。

「んじゃ、聡里も無事だったんなら明日にもメモリを奪還しに行くぞ!」

「「おー!」」

亜樹子さんと僕の掛け声がハモリ、その日はお開きになった。

くそして、翌日く

翔太郎さんと僕は例の犯人の家と思われる家の前に到着した。

「ここ、ですか？流石にこれは……」

「いや、でも反応はここから出てるぜ？ホークフォンもここを示してるしな」

ホークフォンが示し、スパイダーショックの反応があるその場所は、なんと警察署だった。

「まさか警察関係者だったとはな……だがこれで合点が言ったぜ。」

道理であんだけ新聞に載るような事件ばかり起こして捕まらない訳だ。

事件を起こした直後に変身を解除して様子を見に来た警官の振りをして紛れ込めば誰も怪しまねえ」

「そういうことですか……でも、こっちも警察にはコネがありましたよね？」

「ああ、そういうことだ。刃野刑事たちに話は通してある。後はお前が犯人を見つけて、俺が注意を引き付けている間にメモリを取り返せば完了だ。

行くぜ、聡里」

「ええ、翔太郎さん」

「こんちわ、ジンさん。連絡通り来ました」

翔太郎さんは、刃野刑事に挨拶し受け付けの人に教えられた部屋の中へ入っていった。

「おう、翔太郎。それとそのボウズが例の助手くんか。氷川から聞いたぞ」

「鳴海探偵事務所・探偵補佐の星雄です。以後お見知りおきを」

「なかなか決まってるじゃないか。さて、用事ってのは何だ？」

そう切り出されたところで、翔太郎さんは事情を伝えた。

もつともライダーの所は隠して、例の怪人の正体が警察の人間らしいこと、それと

自分たちにとって重要なデータが入ったUSBメモリが盗難された、と伝えた。

僕らの話を最初は半信半疑で聞いていた刃野刑事だったけれど、どうにか説得できたようで所内を見て回るようになった。

同じ部屋の中でどうやら刃野さんの部下らしい刑事さんが露骨に不

快そうな顔をしていたけど、スルーすることにした。触らぬ神に祟り無し！

その後、案内される途中に前の事件でお世話になった不器用な警官さんに会ってお互い挨拶がかぶったり、すごい気が強い女の人がある横でなんか地味な人に止められていたり、ややこしい状況になっていたけれど一通り所内を見て回った。

そして最後の「拾得物管理室」に来たとき、僕らは目当ての男を見つけた。

「翔太郎さん！この男です！！」

そこにいたのは紛れもなく、件のベロシティドーパントの変身者だった！

「なっ、お前、どうして！？」

「悪いいな、以前コイツを襲撃したときに付けさせてもらったぜ」

翔太郎さんがそういう男の足元を指差し、

男が確認すると足、靴の側面に蜘蛛の巣をかたどったデザインの発信機が張り付いていた。

「い、いつの間に！」

「僕が倒れた後に、ちよろっと。血糊まで用意して正解だったみたいですね、偽善者さん」

僕のその言葉が、どうやら逆鱗に触れたようだった。

「偽善者、だと？俺が何のために警察に入ったと思ってるんだよ！俺は悪人を取り締まるために警察官になったんだ！なのに毎日毎

日こんな狭い部屋の中でカンヅメで

仕事といえは拾得物を整頓してケースの中に入れる、それだけだ！
だから俺は、犯罪者共を取りしめるためにこの『力』を手に入れ
たんだ！邪魔をするなア！！」

そう叫ぶと、男はガイアメモリを懐から取り出しスタートアップス
イッチを押し込んだ！

「VELOCITY！」

「探偵風情が……お前らまとめて、正義への反逆の罪で裁く！」
男の足首に生体コネクタが現れ、男はそこにメモリを挿入してしま
う。

「VELOCITY！」

「ひええ〜、怪物〜！」

と、情けない声を上げて逃亡する刃野刑事。あの人本当に刑事さん
なんだろうか？

「ボサつとすんな聡里！ここは俺が相手をするから、お前は！」

「わかってますよ、翔太郎さん！」

短いやり取りの後僕は部屋を飛び出した。

「おや、今回は助手の方は戦わないのか。臆病風に吹かれて逃げ出
したか？」

「いいや、違うね。アイツは今変身できねえから逃がしただけだ。
行くぜ、ドーパント！」

「面白い、スペックを最大限発揮できない状態でいつまで持つかな
？」

「言つてな。行くぜ、フィリップ！」

翔太郎さんは呼びかけ、フィリップさんは答える

『勿論さ、翔太郎。行くよ!』

「『変身!』」

「CYCLONE! JOKER!」

ガイアウィスパーと風が警察署の廊下を駆け抜け、翔太郎さんはWへ変身した。

「さあて、ちよつとばかり厳しいがいけるな、フィリップ?」

「何を今更。翔太郎、頼むよ」

その頃、僕は拾得物管理室に舞い戻っていた。理由は簡単。

「さて、ホーク!マンタレイ!スパイダーに、スタッグ、バット!」

「HAWK」「MANTAREY」「SPIDER」「STAG」

「BAT」

ガジェットにギジメモリを挿入すると、ガジェットは一斉にライブモードへ切り替わった。

「いいかい、皆。ルナメモリとトリガーメモリを探すんだ!GO!」

僕のその掛け声と共に、室内の一斉搜索が始まった。

「W SIDE」

一方、ドーパントと戦闘しているダブルはかなりの苦戦を強いられていた。

「がつ、ぐあつ!」

「くつ、やはりサイクロンジョーカーでは追いつけないよ、翔太郎!」

ベロシティドーパントの高速移動にWCJフォームでは攻撃をすることが出来ない。

攻撃を見切るのが精一杯で、それでも流しきれなかったダメージが刻一刻と蓄積していた。

「いい加減ダメージが溜まってきている……これでは翔太郎、君が持たないよ?」

「わーってる! 聡里、早くしてくれよ……!」

そう翔太郎が考えたとき、油断しているベロシティドーパントの側面に攻撃が直撃した!

「がっ!! 何だ!?!」

そちらをドーパントが振り返ると、そこに立っていたのは仮面ライダーカブト。

カブトが能力を制限され、わずかな時間しか使用できないクロックアップを利用し

カブトクナイガンでドーパントを射撃したのだった。

「悪いが、そいつを倒させるわけにはいかない。俺も相手をさせてもらおうか」

「この間のクロックアップライダーか!?! なら、こっちもだ!」

そう言い、ベロシティドーパントはガイアウイスパーを鳴り響かせる。

「WORM!」

「貴様は長時間クロックアップできないんだっただな! ならば、こちらが圧倒的に有利だ!」

そう叫びつつ、クロックアップの世界でカブトと戦闘し続けるドーパント。

さしものカブトも焦りを見せ、攻撃をかけるがドーパントは時間を

稼ぐだけのつもりのように、ことごとく交わされる。
そして、クロックアップの限界時間が訪れた。

「ぐっ、限界か……ッ」

「EMERGENCY CLOCK OVER!」

その電子音と共にクロックアップが解除され、同時に変身も解除されてしまう。

「こちらの世界に来てから、ゼクターのメンテナンスも出来なかったからな。ガタが来たか……」

「フン、どうやら終わりのようだな」

ドーパントは勝利宣言とばかりにクロックアップを解除し、天道に話しかける。

「お前もどうやら、俺の処刑リストに載っているようだ。丁度良い。ここで処刑を……」

ドーパントがそう言いかけたとき、今度は背後から何かが激突し動きを止める。

「今度は何だ!」

ドーパントを妨害したのはホークフォンの体当たりだった。そして、そこに居たのは。

「とある傭兵が言っていましたよ? 『獲物を前に舌なめずりは、三流のすることだ』って。」

貴方は三流どころかとんだチンピラみたいですね、ドーパント!」
聡里が、怒りもあらわにそこに居た。

（聡里SIDE）

「貴方の正義とは、なんですか?」

僕は、ドーパントにそう問いかける。

「決まっている！罪を犯した人間を裁くことだ！」

「罪とは何ですか？」

僕は、重ねて問う。

「法に従わない事、他人の行為を妨害する事だ！」

「では、貴方はつまみぐいをした子供を裁くのですか？
廊下を走った子供を捕まえますか？」

そして、人を傷つけた自分を捕らえるのですか？」

僕は、最後に問う。

「そ、それは……」

「かつて、一人の女性のために戦っていた男が居ます。

その女性は人間ではなかった。しかし、その存在自体が人間に危害を及ぼす『罪』とされていたのです。

それでも、その女性はその女性でした。どこまでも優しくった」

「な、何が言いたい！？」

「罪とは、一人が勝手に押し付けるものではないんです。正義もまた然り。

しかし、貴方はその自分の勝手な『正義』で多くの人を傷つけてきました。

これも立派な罪と言えるでしょう」

「う、嫌い！」

ドーパントがわめき、一歩僕から後ずさる。

「貴方の罪は判りましたか？」

そのドーパントに向け、僕は一步足を踏み出し、語る。

「どうしても貴方が罪を数えないのなら、僕が数えさせてあげます！」

僕がそう叫びメモリーメモリを取り出したその時、不思議なことが起こった！

「どうした、カプトゼクター！？」

僕の元に、正確には僕の取り出したメモリーメモリの元にカプトゼクターが飛んで来て、

メモリーメモリになにか光のようなものを照射したのだ。すると、メモリーから新たなガイアウィスパーが鳴り響いた。

「KABUTO！」

「カプトの記憶……記憶しました。行きますよ、ドーパント」

新たな力を得たメモリーメモリをロストドライバーにセット、右手でスロットを払うようにして開く。

「……変身」

「MEMORY！」

そしてガイアウィスパーと閃光と共に僕はメモリーへと変身し、さらにあるシステムを起動する。

「メモリージェクター！カプトメモリ、イジェクト！」

「KABUTO！」

メモリーのベルトに追加された装置の一つ『メモリージェクター』から一本のメモリが排出され、僕はそれを空中で掴む。

「カブトメモリ。天道さん、力をお借りします」
僕はそのメモリを、ロストドライバーにスロットする。

「KABUTO！」

そのガイアウイスパーが鳴り響いた瞬間、メモリーの装甲の表面を六角形のエフェクトが包み込み、
ベルトこそロストドライバーだけれど、仮面ライダーカブトとなつて僕はそこに居た。

「な……」

「メモリーが、カブトになった……？」

その光景に翔太郎とフィリップは絶句、天道も驚いたような表情でメモリーカブトを見ていた。

「な、なぜお前があのかの仮面ライダーに！？」

ドーパントもどうやら混乱しているらしい。

「僕は、仮面ライダーの『記憶』を宿したメモリーメモリのライダー。」

だから、このシステムも当然使える」

僕はそう語り、ベルトの『アビリティスロット』にカブトメモリを一旦スロットし、発動させる。

「KABUTO！ ABILITY CLOCK UP！」

そのガイアウイスパーと共に、僕の姿はドーパントの視界から消え去った。

「な、クロックアップ……！」

ドーパントが理解したときにはすでに手遅れ、僕はドーパントの背後に立っていた。

「遅いですよ」

「な!？」

僕はドーパントの背中に蹴りを叩き込み、その隙にWに二本のメモリを投げ渡した。

「ダブル、メモリを返します。マキシマムドライブを」

「あ、ああ。判ったぜ」

『聡里くん……?』

そしてWはフォームチェンジし、W・LTフォームになった。

「行きますよ、メモリブレイク」

ダブルがマキシマムドライブを発動したことを確認し、僕もマキシマムスロットにカプトメモリをスロットし、発動させる。

「TRIGGER! MAXIMUMDRIVE!!」

「KABUTO! MAXIMUMDRIVE!!」

「ダブルはそのまま、トリガーフルバーストを打ち込んでください。着弾地点に放り込みます」

僕はそういい残し、再びクロックアップを発動し、ベロシティドーパントに肉薄する。

「ひっ!？や、やめてくれ!」

「……貴方の正義、記憶するまでもありません」

僕はその台詞と共に、足にエネルギーを貯める。

「さあ。天国を、味わえ」

「ONE TWO THREE」

「「RIDER - KICK」！」

「があああつ！」

その一撃で吹き飛んだドーパントは、クロックアップが解除される。そしてその着地点は丁度ダブルがトリガーフルバーストの着弾地点にしていたところだった。

「ぎゃああああああああああああつ！！！」

男の断末魔の悲鳴と共に、メモリが排出され、粉々に砕ける。普通の砕け方ではなく、粉末に分解される、むしろ消滅であった。

「一件落着、ですか……ふう」

（翔太郎SIDE）

「聡里……？」

何だったんだ、今のアイツの迫力は……？

ビギンズナイトのおやつさんに匹敵する恐ろしさだったぞ……？

「……さて、翔太郎さん、天道さん」

俺が考えていると、聡里が声を掛けてきていた。

「なつ、なんだ聡里！？」

「なんでそんなに驚くんですか……まあいいです。」

それより、帰りましょう。僕、お腹すいちゃいましたよ」

そう言い無邪気に笑うその顔からは、先ほどのような殺気は微塵も感じられなかった。

そして釈然としない気分のまま、俺たちは事務所へ戻った……

「事件記録：風都の滅殺仕置人事件」

「今回から、件名をつける事にしてみました。」

「犯人の動機は犯人自身が語っていたようなのですが、なぜか僕はそのへんの記憶があいまいなんですよね」

「せっかく記録をはじめたのにな……っと、これはいいでしょう」

「今回、僕は新たな力、カブトの力を手に入れました」

「メモリーに他のライダーへの変身能力まであったとは、驚きとしか」

「他にはどのような能力があるんでしょうかね？」

「謎は深まるばかりです」

「これから、も 新たな 能力 は 開放されて 行くでしょう……
っと。もうこんな時間か。ありがとう、マンタレイ」

「そういつて事件記録のデータをUSBメモリに保存して、マンタレイを開放してやってから僕は床についた。」

続く。

第四話：Vの暴走／天の道を往く神速（後書き）

作者「やっと落としどころがまとまったぜこの話は」

聡里「犯人が警察つてのはダブルではありませんでしたっけ？」

作「俺も全話は見られなかったから判らないが、たぶんなかったと思うぞ？」

今回の事件のモデルはコックローチのときのだしな^{ヤマ}

聡「そうですね。それじゃ、今回もあとがきコーナーですね」

作「ああ。ゲストはこの方です！どうぞ！」

天道「よう、聡里」

聡「つて、天道さん！ここにこれるんですね……」

天「まあメタ空間だしな」

作聡「「おいおい」」

天「まあそれはいい。それより、今回出た新たなメモリーの能力の解説をしたらどうだ？」

聡「……そうですね、じゃあ、以下設定をどうぞ」

別のライダーへの変身について
メモリーの能力の一つ。

メモリーのドライバーにはスロットが数個追加されており、それぞれがマキシマムスロットのような形をしている。

そのスロットのうち一つは『メモリージェクター』というシステムで、

変身者のコールと意思に反応しライダーのメモリを生成、射出するもの。

そしてそのメモリを使用して変身することで、そのライダーに変身できる。

しかし、そのライダーの力を受け取らなければ変身できない

聡「……とまあこういったところですかね。

ディケイドとコンセプトが似てますけど」

作「言い訳はしない。ディケイドが元だ」

聡「えー」

作「俺は新しいものを考えるのは苦手なんですね。あるものは使わないといけないんだ」

聡「そういう問題ですかね……？まあいいや。

それと、途中でいろいろライダーのネタが混ざっているのは皆さん気づいてますかね？」

作「たぶん気づいてると思うぞ？ けっこうわかりやすいネタだったし前回と前々回あたり」

聡「わかった方、よろしければ感想あたりでも書いてみてくださいね」

作「それじゃ、次回予告行くぞ」

聡「了解です」

次回、『記憶のライダー』は！

聡里「どうしてこうなった!？」

???「私は、なぜこんなところに居るんでしょうか？」

???「不幸だあああああ!」

聡里「なんで君たちが現実に居るんだ!？」

次回、『記憶のライダー』第5話
混乱のD/カオスな風都

作聡「これで決まりだ!!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9235y/>

記憶のライダー

2012年1月10日06時49分発行